

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 30 日現在

機関番号：13601

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009 ～ 2012

課題番号：21720032

研究課題名（和文） J. McN. ホイッスラーの日本における受容とその影響の広がり

研究課題名（英文） J. McN. Whistler's influence and impact in Japan

研究代表者

小野 文子（ONO AYAKO）

信州大学・教育学部・准教授

研究者番号：10377616

研究成果の概要（和文）：本研究では、4年間の調査と研究により、アメリカ人の画家、J. McN. ホイッスラーの日本における紹介と受容、特に明治・大正期について明らかにした。美術、文学、文芸雑誌等に掲載されたホイッスラーに関する記述を収集し、整理、分析した。さらに、ホイッスラーの日本における影響は、美術だけでなく文学にも及ぶものであり、詩人たちにもインスピレーションを与えたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）： J. McN. Whistler's introduction and impact in Japan, especially in *Meiji* (1868-1912) and *Taisho* era (1912-1926) has revealed through four years' researches and studies. I have collected articles on Whistler published in art and literary journals, and analyzed process of his introduction and acceptance in art and literary world in *Meiji* and *Taisho* era.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,900,000	1,170,000	5,070,000

研究分野：美学・美術史

科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史

キーワード：J. McN. ホイッスラー・ジャポニスム・日欧文化交流

1. 研究開始当初の背景

J. McN. ホイッスラーは、日本の文化や美術作品から大きなインスピレーションを得て作品を制作したことはよく知られており、ホイッスラーのジャポニスムについて、多くの研究が行われてきた。しかし、ホイッスラーの日本人との直接的な接点や、日本美術に関する知識等については明らかにされてこなかった。また、ホイッスラーの芸術至上主義の立場を明確にした『10時の講演』は「美の

物語は、パルテノンの大大理石が刻まれ、北斎が、扇の富士山の麓に鳥の刺繍をした時にすでに完成している」という一文で終るものの、講演のなかで画家が日本美術について具体的に述べてはいないことから、ホイッスラーが実際に日本美術に何を見出し、作品や芸術論を確立したのかを知る手がかりがない状態であった。

これまでのジャポニスム研究が欧米の資料を中心として研究が行なわれていることへの反省から、日本の明治期における資料に目

を向けた調査を行った。その結果、ホイッスラーが生前複数の日本人と接点を持っていたことが明らかとなった。また、明治、大正期に渡欧した画家たちの作品には、ホイッスラーからの影響が明らかに見て取れ、ホイッスラーのジャポニズムを研究の出発点として、日本におけるホイッスラーの影響について更なる研究の発展があると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本美術の影響を受けた唯美主義者、ジェームス・マックニール・ホイッスラー(1834-1903)の日本における受容とその広がりについて、明治期・大正期・昭和初期の造形芸術と文芸運動という2点を軸として、研究を行なうことである。また、最も早い段階でホイッスラーを日本に紹介した二人の人物(岩村透と久米桂一郎)、岩村透はイギリス美術に強い関心を示したこと、久米桂一郎はフランスに留学しホイッスラーと知己であったラファエル・コランに師事したこと、イギリスとフランスを中心に活躍したホイッスラーの日本への紹介のルートを明らかにし、さらに、フランス美術の影響が日本画壇の中心であるとされている明治中期以降の日欧美術交流の実情を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 明治期・大正期・昭和初期に美術や文芸雑誌に掲載されたホイッスラーに関する記事、あるいは美術評論家の著書を調査し、資料整理を行なう。特に、明治中期にホイッスラーを紹介する記事を書いた3人の人物、①イギリス美術に傾倒していた岩村透 ②ホイッスラーとも知己であったラファエル・コランに学んだ久米桂一郎 ③ホイッスラーが芸術至上主義の立場を明らかにした『10時の講演』を翻訳して『方寸』掲載した石井柏亭などに注目する。

(2) 収集した資料中に図版として掲載されているホイッスラーの作品リストを作成し、視覚的な影響について検証する。

(3) 収集した資料を分析し、渡欧してホイッスラーの作品を実際に見ることができた画家たちを特定し、ホイッスラーから影響を受けたと思われる作品について調査する。

(4) 画家たちが欧米滞在中に開催されたホイッスラー展を見ることのできたホイッスラーの作品リストを作成する。

(5) (2)、(3)、(4)を踏まえて、日本

の芸術家たちが、ホイッスラーの作品から受けた影響を、構図や絵具の使用法など具体的に検証する。

(6) 「芸術のための芸術」を唱えたホイッスラーの絵画作品や唯美主義の思想が、芸術至上主義が広まった日本の美術や文芸運動のなかでどのように解釈され、受容されたのかについて検証する。特に石井伯亭、山本鼎、北原白秋、蒲原有明、木下杢太郎などを中心とした美術や文芸などの新しい浪漫主義的な耽美派運動のなかでどのように取り入れられたのかについて明らかにする。

4. 研究成果

(1) パリを拠点として日本美術の紹介とジャポニズムの隆盛に重要な役割を果たした美術商林忠正が、いち早くホイッスラーについて言及していることが分かった。林忠正は、東京帝国大学教授の外山正一が明治美術会でおこなった「日本絵画未来」に反駁した「外山博士ノ演説ヲ読ム」と題した講演でホイッスラーについて言及しており、明治期における「美術」という概念の形成を議論する場においてホイッスラーの信条が紹介され、日本において少なからずホイッスラーの芸術至上主義の考えや、アヴァン・ギャルドとしての姿勢が参照されたことが明らかになった。

(2) 近代日本の西洋美術史・美術批評の黎明期に大きく寄与した岩村透が、主に文献研究の面から、ホイッスラーを日本に紹介したことが明らかとなった。ホイッスラーの芸術家としての理念や生き方に着目したものであったが、これは、岩村透のジョン・ラスキンへの傾倒からホイッスラーへの関心が芽生え、1878年のホイッスラー対ラスキンの裁判において展開されたホイッスラーの芸術論に着目し、日本に紹介したことが明らかになった。

(3) フランスでラファエル・コランのもとで学び、黒田と共に明るい外光派の画風を日本に広げ、明治洋画壇の指導的役割を果たした久米桂一郎が、ホイッスラーのバイオグラフィを『光風』で発表した。久米の作品に描写や記述から、実際にホイッスラーの作品を見ていた可能性が十分に考えられ、美術批評に携わった岩村とは違った角度からホイッスラーを日本に紹介したことが明らかとなった。

(4) 明治から大正期にかけて、「文芸」というカテゴリーの雑誌が多く出版されたが、ホイッスラーがこれらの雑誌において様々

な文脈のなかで引用され、解釈された。資料中に図版として掲載されているホイッスラーの作品、特に彼が日本から影響を受けて制作した作品は、明治・大正期の作家たちの創作意欲を刺激した。ホイッスラーの「芸術のための芸術」の解釈は、日本における西洋芸術・文学の受容のなかでも中心をなすものであり、彼の唯美主義の思想と日本美術とのつながりのなかに、日本の芸術家たちが自らの文化的アイデンティティーを見出した一面も垣間見ることができる。

(5) 収集した資料の図版等を参照しながら、明治・大正期に実際に作家たちが目にすることができた作品を特定した。その結果、ホイッスラーが日本美術からインスピレーションを得て制作した作品がより広く紹介され、日本の作家たちに影響を与えたことが明らかになった(絵画、詩、小説)。つまり、彼が日本から影響を受けて制作した作品は、明治・大正期の作家たちの創作意欲を刺激したのである。ホイッスラーの「芸術のための芸術」の解釈は、日本における西洋芸術・文学の受容のなかでも中心をなすものであり、彼の唯美主義の思想と日本美術とのつながりのなかに、日本の芸術家たちが自らの文化的アイデンティティーを見出したことを明らかにした。

(6) 収集した資料を分析する過程で、ホイッスラーのパトロンであったチャールズ・ラング・フリーアを通じた日本との接点の可能性を推測した。そこで、国立スミソニアン協会フリーア美術館のアーカイブにおいて書簡についての調査を行い、ホイッスラーと直接接点をもった日本人、あるいは相互の影響関係のキーパーソンとなった人物を見出す作業を行った。収集した資料から、ホイッスラーの日本における受容や解釈について、新たな展望を見出すことができる可能性が明らかとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 小野文子 オンラインセミナー報告 異文化交流と普遍性への切望: 1908年のピーコック・ルーム ‘Aesthetic Dialogue – East and West Whistler’s points of Contact’, : ジャポニスム研究(ジャポニスム学会誌), 31号, 査読無, 2011, pp. 85–93.
- ② 小野文子 ジェームズ・マックニール・

ホイッスラーの日本における紹介-近代日本の文芸界を中心に: デアルテ(九州芸術学会誌), 27号, 査読有, 2011, pp.69-83

- ③ 小野文子 J.MCN.ホイッスラーの作品と芸術論についての日本における紹介-東西交流の視点から林忠正、岩村透、久米桂一郎を中心に-: ジャポニスム研究(ジャポニスム学会誌), 30号, 査読有, 2010, pp. 28-44.

[学会発表] (計3件)

- ① 小野文子 ‘Networks of Modernism: A New Look at Whistler and Japan’, *Palaces of Art: Whistler and the Art Worlds of Aestheticism*, 2011年10月28日, Freer Gallery of Art and Arthur M. Sackler Gallery, The Smithsonian Institution, USA
- ② 小野文子 ‘Whistler and Japonisme’, *Imagining Japan: Anglo-Japanese Influences on 19th century British Art and Design*, 2011年6月25日, Victoria & Albert Museum, London, UK
- ③ 小野文子 ‘Aesthetic Dialogues of East and West’, *Whistler’s Points of Contact Cross Cultural Interchange and Aspirations of Universality: The Peacock Room in 1908*, 2011年5月11日, Freer Gallery of Art and Arthur M. Sackler Gallery, The Smithsonian Institution, Washington DC, USA (オンラインセミナー)

[図書] (計1件)

- ① 小野文子 ‘Networks of Modernism: A New Look at Whistler and Japan’, *Palaces of Art: Whistler and the Art Worlds of Aestheticism*, Smithsonian Scholarly Press 印刷中

[その他]
ホームページ等

① Whistler's Points of Contact Cross Cultural Interchange and Aspirations of Universality: The Peacock Room in 1908 (オンラインセミナー) URL : <http://smithsonianconference.org/peacockroom/>

② Palaces of Art: Whistler and the Art Worlds of Aestheticism
URL:<http://www.asia.si.edu/events/LCSchedule.asp>
You tube:
http://www.youtube.com/watch?v=NzlMVUAD_dI&list=PLAFC923519D158555

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小野 文子 (ONO AYAKO)
信州大学・教育学部・准教授
研究者番号 : 10377616